

『万延元年のフットボール』論

— 鷹四への回答として —

一、作中人物が作者を批判する

鷹四が「本当の事」を蜜三郎に告げたいとの意向を述べる場面で、作品の内容からすればいささか唐突とも思われるような発言を鷹四はしている。

△「作家か？確かに連中が、まさに本当の事に近いことをいって、しかも撲り殺されもせず、気狂いにもならず、生き延びることはあるかもしれない。連中は、フィクションの枠組でもって他人を騙しおおす。しかし、フィクションの枠組をかぶせれば、どのように恐しいことも危険なことも、破廉恥なことも、自分の身柄は安全なままでいってしまうということ自体が、作家の仕事を本質的に弱くしているんだ。すくなくとも、作家自身にはどんなに切実な本當の事をいうときにも、自分はフィクションの形においてどのようなことでもいってしまう人間だという意識があつて、かれは自分のいうことすべての毒に、あらかじめ免疫になつているんだよ。それは結局、読者にもつたわつて、フィクションの枠組のなかで語られてゐることは、直接、赤裸の魂にぐざりとくることは存在しないと

岩田英作

見くびられてしまうことになるんだ。そういう風に考えてみると、文章になつて印刷されたものの中には、おれの想像している種類の本當の事は存在しない。せいぜい、本當の事をいおうか、と真暗闇に飛びこむ身ぶりをしてみせるのに出会うくらいだ」▽

作中人物が突如作家について語り出すこの一節を読むと、鷹四の直接の話相手は蜜三郎であるにもかかわらず、その向こうに、どうしても作品世界外にある作者の姿を思い浮かべてしまう。つまり、『万延元年のフットボール』（「群像」一九六七年一〜七月号）というひとつの作品世界に右の鷹四の発言が挿入されることによって、読者は、いま自分が読んでゐるこの『万延元年のフットボール』という小説とは何か、これを書いた作家大江健三郎とは何かといった、メタレベルの視点を獲得し、また、その一方で、作品世界に埋没する快樂を失う危険に晒されることとなるであろう。作品世界の側からすれば実に不安定なこの部分を、大江があえて挿入したのはなぜであろう。その事情を理解するために、ここで『万延元年のフットボール』の前年に発表されたエッセイ「作家は文学によつてなにをもたらしうるか？」⁽¹⁾を参照したい。

大江は、そのエッセイのなかで、右に掲げた鷹四の言葉を含む蜜三郎と鷹四両者の会話部分の草稿——それは成稿と若干字句の異同はあるものの、ほとんど成稿と同一である——を引用しつつ、小説という表現形式にまつわる疑わしき、小説を発表することの「うしろめたさ」について述べ、「この一連の文章は、この小説（『万延元年のフットボール』）が生み出される直前の内面生活と深く関係している、いまの僕は思う。」（括弧内は引用者）と書いている。このことから、鷹四のおこなった、作家が虚構を書くものである以上、作家はついに「本当の事」を他者に告げることはないという作家批判が、『万延元年のフットボール』執筆にあたって、大江自身の内でおこなわれていた自己批判であったことは明らかである。さらに、このことと合わせて、同エッセイの次の一節にも注目したい。

△ひとつの文章を発表したあと、見知らぬ他人から——中略——深夜に電話がかかってきて、その文章についての批評が語られはじめる。と、僕をとらえるのは、講演会での拍手に接したとおなじ、恐ろしさと恥かしさである。むしろ僕の文章に立腹した人間からの、激しい侮辱の言葉がやってくる時は、まだ、それに対する態度が容易なほどだ。むしろ僕は、抗議、脅迫の手紙または電話に接するたびに、一種の安堵の念をあげてきたようにさえ思うのである。表現という、ひとつのうしろめたい行為をおかした人間として、自分が処罰されているという感覚のみが、その安堵の原因である。▽

江藤淳や大久保典夫によって指摘された、大江における自己処罰⁽²⁾、自己回復という心的働きの一端を、ここにも見ることができるとは小が、この一節を考慮に入れれば、大江があえて前掲の鷹四の言葉を小

説に持ち込んだ事情が理解できるであろう。すなわち、大江は、彼自身に向けられる作家批判を作品中の人物に語らせることによって、読者に、作家である自己への批判意識を喚起したのだと考えられる。言い換えれば、大江は、彼の直面していた、作家という存在に対する本質的な問いを作中に顕在化させることで、その問いから逃げ出さないように自己を拘束したのである。

では、鷹四の作家批判にたいして、大江はいかなる回答を本作品において提出したのであろうか。

小論では、鷹四との関係などから蜜三郎をできるだけ照らし出すことにより、右の問いに答えたい。

二、蜜三郎と鷹四の関係

『万延元年のフットボール』に関する本格的な論考のなかでもっとも早いものに、松原新一の「地獄と救済の呼応」⁽⁴⁾がある。松原はそのなかで、蜜三郎を「認識者」、鷹四を「実践者」として捉えており、この両者の位置づけは、今日の定説になっていると見てよい。私も、蜜三郎を村の歴史を言葉によって定位置していく人物、鷹四を村の歴史上の人物に身体を通じて同化する人物と理解しており、右の定説にはほぼ従うものである。ほぼという曖昧な表現をあえて用いるのは、蜜三郎を「認識者」とする、その「認識」の意味をいまいちど省察する必要を感じているからであるが、このことについては後で考えることにする。

いま問題としたいのは、両者の関係の捉え方である。

その点に言及したものを列挙してみると、両者の関係を、松原は

「対立・抗争」、渡辺広士は「永遠の分裂」⁽⁵⁾、片岡啓治は「無縁」⁽⁶⁾とそれぞれ捉えている。ただ、小森陽一だけは、両者を対立の図式に固定化することに対して批判的であり、私も、その考え方に賛成である。しかし、小森の提唱する、「この二人を作中人物として実体化するのではなく、行動へ誘う想像力のテキストと、認識を深めさせる想像力のテキストとの相互葛藤として捉え」る方法を採用するつもりはない。むしろ、これから私は、両者を「実体化」して、論を進めていくことになる。

さて、蜜三郎と鷹四は、おのおのの八根所[△]を求めて四国の森に向かい、そこで、鷹四は、曾祖父の弟・長兄・S次らに同化して、スーパー・マーケットの天皇に対抗すべく村人を煽動するのに対し、蜜三郎は、同化しうる対象を見出せずに倉屋敷に逼塞し、鷹四の行動を批判的に傍観する。私は、その限りに於いて、従来なされてきた両者の対立的位置づけは正しいと考える。しかし、鷹四が村の娘を殺害したと自供するあたりから自殺するに至るまでについては、どうしても対立として両者を捉えることはできないと思われるのである。

そこでまず、鷹四の「本当の事」に眼を向けてみたい。鷹四の告白によれば、鷹四は、白痴の妹を死なせてしまつて以来、暴力的なる自己を正当化したいという欲求と、そういう自己を処罰したいという欲求に引き裂かれて生きてきたという。鷹四の「本当の事」の告白の一部を次に引用する。

△おれは妹に、自分たちは選ばれた特別の二人なのだから、おれも妹も、お互い同士より他の人間に興味を持つことはありえないし、あつてはならないと教えこんだ。△

△妹は、いったん気持を定めるとまったく勇敢で挫けることがなかった。これから死ぬまでふたりきりで共同してやってゆくんだ、ということを誇りにしていた。そして……妹が妊娠したんだ。伯母がそれに気づいた。伯母から注意されて、おれは気が狂うほど恐しかった。妹との性関係が曝かれてしまったら、ただちにおれは恥のため死ぬだろうと信じた。△

そして、鷹四は、妹に村の青年に強姦されたと偽証させ、墮胎手術と不妊手術を受けさせ、鷹四に救いを求める妹を「孤立無縁」に陥れて、自殺させた。

ここで、鷹四が心身ともに妹を傷つけた、その暴力の震源を探れば、それは、鷹四の「恥」の感覚である。この「恥」というのは、大江文学のキーワードの一つであると私は考えているが、いま、鷹四についてのみ見るならば、それは、近親相姦をタブー視する村の八まなざし[△]を受け入れたところに生じる、土着的な精神風土に根づいた「恥」の感覚である。要するに、鷹四は、妹とのあいだにのみ成立する、きわめて個人的な関係と、村という土着的で社会性を帯びた共同体との交錯点に立ち、その結果、自己の生存の要を後者に置いたのである。

そのため鷹四は妹を排したわけで、したがって、鷹四の暴力的なる自己を正当化したいという欲求には、社会的な共同体に帰属したいという欲求が分ちがたく結びついていると考えられるのである。

ところで、村へ帰って以後の鷹四の言動には、いくつかの変節が見受けられる。それを簡略に示せば、①スーパー・マーケットの天皇による村の経済的支配を阻止するため村人を煽動する↓②鷹四の子供を身籠もった、蜜三郎の妻葉採子との結婚の意思を表明し、村人を見捨

てる↓③村の娘を殺害したと自供する↓④自殺、となる。この四段階に、鷹四の背反する欲求を照らし合わせてみると、どうなるであろうか。まず、①は、明らかに、村へ帰属したいという欲求から発したものと考えられる。また、鷹四による煽動の結果、村には暴力的な空気が流れ始めてもい、これは、鷹四の暴力的なる自己の正当化の延長線上にあるものといえよう。次に、②では、鷹四は、死んだ妹を菜採子にだぶらせていると思われ、①の反動として理解できるが、しかし、かといって、そこに暴力的なる自己を処罰したいという欲求まで見ることはできない。③については、はたして鷹四が実際に村の娘を強姦しようとして殺してしまっただか否か、その真偽のほどは不明であるが、ともかく、鷹四はそう主張することによって暴力的なる自己を顕在化させたかったことは確かであり、そればかりか、村の娘を殺害した仕返しとして、村人に自分を殺してもらおうとする自己処罰の欲求が働いてもいたことは、のちの鷹四の言葉に明らかなるところである。ここには、村への謀叛を犯した自己を、当の村人の手を借りて罰してもらおうとする、鷹四の振れた心理が窺える。つまり、③における鷹四は、自己が反・村的であることの証明を村に委託しているのであって、実質的に、村の圏内から一歩たりとも出てはいないのである。④の自殺が、その超脱であることはいうまでもない。鷹四は、暴力的なる自己を、みずからの手で葬ることによって、背反する欲求の両者を満たし、おのれの尾に食らいつく円環状の蛇となって、自己を完結したのである。

以上のように、鷹四が村に帰ってから死に至るまでの軌跡は、「本當の事」があつて以来鷹四に生じた欲求との関連から辿ることができ

る。つまり、鷹四の言動は、鷹四の欲求から生じた内発的なものとして諒解できるわけだが、しかし、内発的であることが、必ずしも他者からの作用の無効性を意味するとは限らないはずである。そこで、注目されるのは、②から④に至る過程でなされた、鷹四と蜜三郎との会話である。

まず、鷹四が②結婚の表明から③殺害の自供に至るあいだの二人の会話を見てみよう。鷹四が村人のことを「ちっぽけで卑小な蠅どもだ」といったのに対し、蜜三郎は、「きみが谷間と『在』の民衆をそのようにも軽蔑していることを、きみの蠅どもがいつまでも気づかないと思うのか」、あるいは、「かれ(任職)はきみのように谷間の民衆を軽蔑しきっている者の、本当の味方ではない」(括弧内は引用者)と、鷹四の村人にたいする軽蔑を批判している。これは、②が、①の反動であり、いわば鷹四の村離れであることへの間接的な批判ともいえる。そして、さらに、蜜三郎が鷹四にいった次の一言、「蠅の攻撃力は、きみに向かつてもまた発揮されるぞ。むしろその時はじめてきみの暴動のすべての側面が完結することになるかもしれないじゃないか?」は、のちの殺害の自供に託された、鷹四の自己処罰の願望を、ほとんど暗示しているといつてよい。

つぎに、③殺害の自供から④自殺に至るあいだについて見てみると、蜜三郎は、「そうだ、鷹は自分の意志で最初からひとつの暴力犯罪を構築する勇氣はないが、いったん事故で犯罪にまぎらわしい状況がおこると、待ちかまえていたようにそれへ自分をむりやり挿入して、リンチか死刑のどんづまりに自分をみちびこうとしている。僕が理解しているのは、そういうことだ」といつている。ここで指摘されている

事柄は、要するに、「自分の意志で最初からひとつの暴力犯罪を構築する勇氣」のない者の望む自己処罰の形態であるリンチや死刑の他者依存性である。それを克服することと、自殺を選択することは、同義であろう。

こう見てくると、鷹四の②↓③↓④という移行に、蜜三郎が作用していたことを認めざるをえない。鷹四の死は、蜜三郎の批判を受容した結果である。②以前の両者の関係が、たとえ「対立」や「無縁」であったとしても、以後、二人は、確実に交差しているのである。それにして、かりに蜜三郎を抜きにしても、鷹四自身の欲求から鷹四の行動を一応説明できてしまうというのはどうだろうか。おそらく、これは、蜜三郎が鷹四に向けていった言葉が、鷹四の欲求にあまりに即していたために起きる現象であろう。つまり、鷹四の背反しある欲求が満たされるような方向にむけて、蜜三郎の言葉が水先案内人となって、そこへ鷹四を導いたので。しかし、なぜ、そのようなことが蜜三郎に可能であったのか。この問題は、蜜三郎の認識のありかたと密接に関わっていると思われるが、それについては、第四節で詳しく述べることにする。

三、「森の力」あるいは石を投げる子供

暴力に着眼するとき、蜜三郎と鷹四のほかに、もうひとり、重要な人物が浮かび上がってくる。自殺した、蜜三郎の友人である。

蜜三郎の友人が自殺に至る過程において、そこには二つの暴力が示されていた。一つは、六〇年安保の際、警官に頭を割られたこと（被暴力）であり、もう一つは、精神病者の療養所で看護人を半殺しの目

に合わせたこと（暴力）である。前者に関しては、それが友人の精神的破綻の契機となったということの他にはさしたる情報を得ることができない。そこで、後者に絞って見てみると、友人は、暴力を振るったことに対して、「生まれてはじめてと感ずるほどの深甚な悲しみ」を抱き、その後、性的にマゾヒスティックな偏向を来すようになる。その流れから、友人の抱いた悲しみとは、自己の暴力性の自覚によってもたらされたものであり、性的マゾには、そのような自己を罰する意味が込められていたと受け取られる。

こう見てくると、自然、そこには、鷹四の姿が浮かんでくる。ただ、鷹四の場合には、被暴力に該当する出来事を認めることはできないものの、友人の、療養所で暴力を振るってから自殺に至るまでの情動と、鷹四の、妹とのあいだの出来事から自殺に至るまでのそれとは、ほぼ相似をなしている。事実、鷹四と友人は、二人に共通する「核心」を嗅ぎつけてもいたのである。

しかし、友人と通底しているのは鷹四だけではない。友人の頭を割られた出来事に相当するものが、蜜三郎にもあるからである。すなわち、街を歩いていて蜜三郎に、突然「脅えと怒りのパニックにおちいった小学生の一人団が石礫を投げてき」て、蜜三郎が右目を失明したという事件のことである。友人と蜜三郎に起こったそれぞれの出来事は、暴力を受けた側からすれば、暴力を受ける必然性がないという点で共通している。友人が安保に出掛けた理由も、政治的意志からではなく、たんに妻の付添いとしてその場に居合わせたに過ぎないからである。このように、被暴力の点からすれば、蜜三郎と友人に共通性を見出せばするものの、逆に暴力の行使という点から両者を見てみると、蜜三

郎に、友人が療養所で表した暴力に見合うものを認めることはできない。しかし、かといって、蜜三郎に暴力性が皆無かというところ、それは言い切れないのである。蜜三郎は、自分の子供を放擲して、養護施設に預けている。しかも、その子は、白痴である。この、蜜三郎と子供の関係は、鷹四と妹のそれに似通っている。ただし、相違点もある。妹の場合、彼女は、墮胎と避妊の手術のあと、救いを求めて、鷹四との性交を欲し、それが拒まれると自殺するという具合に、その仕方はどうであれ、ともかく、妹には、自己を表現する欲求がある。ところが、蜜三郎の子供は、「なにひとつ要求しないし、絶対に感情を表現することがない。泣くことすらもない。時どき、かれが生きているのかどうか疑われることもある」ような存在なのだ。両者のこの相違は、両者に対しての鷹四と蜜三郎の相違にも反映していると思われる。すなわち、鷹四は、妹の反応から、自分が妹にしたことの意味を暴力として認識できるのに対し、蜜三郎の場合、反応しない子供の養育を放棄することについて、また蜜三郎自身も、反応しにくい立場に置かれていてと考えられるのである。要するに、蜜三郎の友人と鷹四とは、自己の暴力性をはっきりとしたかたちで現れただけ、それに対する自覚も深く、一方の蜜三郎は、現れた暴力性が曖昧であるだけ、自覚も浅いといえる。蜜三郎は友人の狂気あるいは自殺に想いを巡らして、「かれ(友人)と僕とを峻別し、僕が自分の頭を朱色に塗って裸で自殺することは決してないと、安心することは出来ない。」「マゾイスムへの深入りが、友人の内部に自殺にいたる狂気を生みだしたのではない、その逆だ。そしてこの癒しがたい狂気の種子は僕にもまた……」(括弧内は引用者)と考えているが、蜜三郎の、自己の内部に巢

喰う狂気(暴力性)に対する認識は、予感の域を出るものではない。

しかしながら、自己の暴力性に対する蜜三郎の認識の欠如が、蜜三郎の子供の存在状態にのみ起因するものであるかどうかについては、なお熟考を要する。蜜三郎は、子供らに石礫を投げられ、右目を失明した事故について、「あの事故の本当の意味を理解することを恐れる気持ち」を抱いている。ここでの「恐れ」も、蜜三郎の認識の欠如に、深く関わっているように思われる。そして、この「恐れ」は、蜜三郎が村へ帰った当初、故郷の「森の力」に感じたものと呼応しているのではないだろうか。

《暗く茂った常緑樹群の壁にかこまれて深い溝の底を走っているような林道の一点に停止したわれわれの頭上には、冬空の狭いつながりがある。午後の空は流れの色が変わるように褪せながら緩慢に下降してくる。夜、空はアワビの殻が肉を覆うように広大な森を閉ざさずだろう。それを想像すると閉所恐怖の感覚がめざめる。この森の深みに育った人間でありながら、僕は森を横切って自分の谷間に戻ってゆくたびに、胸苦しいその感覚から自由であることができない。窒息する感覚の中軸に、死滅した先祖たちの感情の髓がつまっている。》

「死滅した先祖たちの感情の髓」とは、たとえばそれは、万延元年の一揆において、村に利用されたあげくに死んだ若者たちの、あるいは利用して存続しえた者たちの「感情の髓」であり、また、第二次大戦後、朝鮮人に殺されたS次の、あるいはS次の死によって死を免れた若者たちの「感情の髓」であろう。より正確に言えば、チョウソカベに追い立てられて最初の祖先が窪地に逃げ込んで以来、今日に至る

まで繰り返されてきたところの血なまぐさい歴史の総体こそ、蜜三郎を胸苦しきさせ、窒息させる、「死滅した先祖たちの感情の髓」、すなわち「森の力」の実体にほかならない。つまり、蜜三郎を恐れさせた子供の突然の投石も、蜜三郎を威圧した「森の力」も、その意味するところは、人類に、因果律を超えて、ほとんど生来的に備わってしまっている暴力性であるといつてよい。そして、そうした、人類の存在自体が恒常的に孕んでいる暴力性の現れである、子供の投石や「森の力」から蜜三郎が眼を背けるかぎり、彼の内部の暴力性についても、蜜三郎は十全に知ることはできないだろう。蜜三郎が、見えない右眼で見るとは、それは、「自分の内部の夜の森」でこそあったのだから。

四、認識者蜜三郎の内実

蜜三郎を「認識者」とする見方が一般であることは既に述べた通りであるが、それと並んで、「傍観者」・「観照者」といった字句がほとんど蜜三郎の代名詞のようにして使用されているのが従来の研究の実状と見て差し支えあるまい。伊豆利彦による、「ひたすら『観照』するばかりで、自分自身を生きず、現実をひきうけて生きることにない受動的な知識人『国内亡命者』⁽⁸⁾といった蜜三郎の位置づけが、その典型である。そして、蜜三郎と應四の関係を対立として固定化する思考の必然的な落ち着き先が、両者の優劣論である。その結果、應四に軍配が上げられやすいのは、これまで蜜三郎に冠せられてきた形容から見て必至である。私としては、両者の質的相違を明らかにすることは重要だが、そのような優劣論は非生産的だと考えている。と同時に、

蜜三郎を、「傍観者」・「観照者」として位置づけることにも懐疑的である。そこで、本節では、認識者蜜三郎が、「傍観者」どころか、村の深部に突き刺さった人物であることを明らかにしたい。

万延元年の一揆の際の竹槍訓練になぞらえたフットボールの練習、それから念仏踊りの復興など、應四が指揮する復古運動から、蜜三郎は離反しながら、しかし、その一方で、蜜三郎は蜜三郎なりに、村の古を辿りはじめた。蜜三郎は、祖母、母、寺の住職、教員、曾祖父の弟の残した手紙、祖父の書いた文献などから情報を収集し、曾祖父、曾祖父の弟、長兄、S次らの像を肉付けていく。蜜三郎が得たそれらの人物像とはいかなるものであったのか、ここでは、曾祖父の弟とS次について特に見ておきたい。この二人についての蜜三郎の受け止め方は、蜜三郎の行った應四批判と密接に関わっていると思われるからである。

曾祖父の弟は、應四の憧れるヒーローであり、應四が同化したいと願っている対象であるが、しかし、蜜三郎にとっての曾祖父の弟は、應四の想像する曾祖父の弟とは、大きな隔たりがある。蜜三郎は住職から以下のような曾祖父の弟像を得ていた、——曾祖父の弟は、万延元年の一揆の際、倉屋敷に籠城して藩の捜査官に抵抗したのち、事前に計画されていた通り仲間を見捨てて自分だけ高知へ出奔し、その結果自分は助かり仲間は処刑された——。すなわち、蜜三郎の得たのは、裏切り者としての曾祖父の弟像である。第二節で見たように、蜜三郎は、村人のことを「ちっぽけで卑小な蠅どもだ」と侮辱する應四を批判するが、この批判の背後には、應四の模倣する曾祖父の弟「裏切り者」という蜜三郎の認識が働いていたと考えられる。

つぎに、蜜三郎と鷹四の表兄S次についてであるが、S次は、戦後復員して村の無法な若者グループに加わった人物である。そして、そのグループが朝鮮人一人を殺害し、その身代わりとして若者グループの一人が殺されることになった際、S次は、みずからその役を担い、朝鮮人に殺されたのである。蜜三郎の記憶にあるS次は、若者グループのなかで最年少の非力で気の弱い人物であり、当初、そういう人間が贖罪羊の役割を引き受けたことについては理解できないと考えていた。蜜三郎は、のちに、S次の友人であった住職の解釈を頼りに、S次の死を次のように考えるに至る。すなわち、S次の死の選択が、曾祖父の弟が仲間を見殺しにして自分だけ生き延びた、その罪の償いを未裔の者として行うためのものであったと、蜜三郎は、S次の死にひとつの意義を付与するのである。蜜三郎が、村人による鷹四への攻撃という図式を鷹四に提出したのも、S次の死にこのような意義を見出していたからだと考えられる。

しかし、蜜三郎が贖罪としてのS次の死に意義をみとめていたことは確かであるにせよ、S次の死についてもそうであったかどうかは疑わしい。第二節で引用した、「鷹は自分の意志で最初からひとつの暴力犯罪を構築する勇氣はないが、いったん事故で犯罪にまぎらわしい状況がおこると、待ちかまえていたようにそれへ自分をむりやり挿入して、リンチか処刑のどんづまりに自分をみちびこうとしている。」という蜜三郎の言葉は、ほとんどそのままS次についても当てはまる。事実、朝鮮人の殺害も、本当に若者グループによるものかどうかは判然としない「まぎらわしい状況」の中で行われたのである。さらに、蜜三郎は、もともとS次を気弱な人物と見ていたわけで、そ

のことと、リンチや死刑に見られる他者依存性の指摘とは、軌を一にしている。つまり、一度は村人による鷹四への攻撃を肯定的に口にした蜜三郎も、それを後に修正したことになるが、いずれにしても、そこにS次に対する蜜三郎の認識が働いていたことは確かである。

また、鷹四の死の直前、蜜三郎は、「緑りかえしきみは危機に甘たれてみせるが、最後のどんづまりにはいつも抜け道を用意しておく人間だ。」「たとえ意識的に認めなくても、きみは連中のリンチをなんとか切りぬけることを予定しているんだ。」と鷹四にいつているが、この批判の背後に、自分だけ四国へ逃げて生き延びた曾祖父の弟があることは疑いを入れない。

以上のように、蜜三郎の鷹四批判の背後には、必ずといってよいほど両者の祖先の姿を認めることができる。ただ、自分の祖先に裏切り者や弱者の影を見る蜜三郎は、全体的に反・祖先の立場に立っていると一応考えられ、そう考える限りにおいて、やはり蜜三郎は、村から離脱しているといわなければならない。しかし、物語は、終末近くになって翻る。裏切り者と思われていた曾祖父の弟は、一揆後、高知へ生き延び、「羊のような人間として」穏やかな死を迎えたのではなく、実際は、地下倉に自己を幽閉して、その死に至るまで、生き延びたおのれを罰し続けていたことが明らかとなるからである。この、曾祖父の弟像の逆転によって、鷹四の死が、まことの曾祖父の弟に連なるものであったことはもとより、鷹四の死を導いた蜜三郎も、自覚の如何にかかわらず、祖先を生きていたことになるだろう。蜜三郎が祖先に想いを巡らした倉屋敷。一見そこは、鷹四の緑り広げる暴動から断絶しているかに見えて、実は、曾祖父の弟の率いる若者たちが籠城

した、また、その地下倉において曾祖父の弟が自己を幽閉した、そういう祖先たちの「感情の髓」だったのである。鷹四に向けた蜜三郎の言葉には、その髓液が通っている。鷹四の、自己の分裂する欲求に基づく曾祖父の弟への同一化の試みに、蜜三郎が即応しえたのも、そういう蜜三郎の言葉の性格によると考えられるのである。

そして、暴力に関わる狂気から自身も決して無縁ではない蜜三郎には、荒々しい歴史を生きた祖先たちに感応する必然性がある。おそらく、失われた記憶を蔵した蜜三郎の血が、蜜三郎の意識を超えて感応するのである。祖先の生を確認し、村の歴史に分け入ることは、同時に、蜜三郎自身に宿る狂気への遡行であったはずである。蜜三郎の見える左眼が祖先にまつわる文献に向けられる時、見えない右眼は、蜜三郎の内部の「夜の森」を照らしていたはずである。そう考えるならば、蜜三郎が、最終的に、養護施設に預けた子供を妻と育てる気になつたのも理解できる。したがって、蜜三郎に窺われる「認識」(言葉)とは、決していい加減な拵えものではない。それは、自己の奥底の、狂気を孕んだ情念(ゴトス)でも呼びうるものから生じた、ある全身的な営みである。

しかしながら、曾祖父の弟像が逆転したのち、蜜三郎が鷹四に対して敗北感を抱いている事実も、やはり忘れるわけにはいかない。譬えれば、これは、演出家の悲しみである。自分が形象化し、息を吹き込んだ演者を、ついに自分自身で演じることなく、舞台の裾から眺めていなければならぬ者の嫉妬の裏返しである。では、なぜ蜜三郎は、鷹四のように演じる側にはなれないのか。そう問い詰めれば、蜜三郎が「森の力」に対する恐れを最後まで完全に克服することはなかった

からだと答えるほかない。この小説に、認識者の属性として、「恐れ」が描かれていることは確かである。しかし、そのことを以て、蜜三郎が村と乖離したままであったとは、以上の考察からも認めがたい。むしろ、本作品には、恐れぬ者の村への自己投企が描かれていたと共に、恐れる者なりのそれについてもまた描かれていたというべきである。鷹四と蜜三郎の八根所 \checkmark は、共に用意されていたのである。より正確に言えば、両者の八根所 \checkmark は、いずれかの根が絶たれる時、それはもう一方の根の絶える時でもあるという、まさに二にして一の関係でこそあったのである。

ところで、これまで触れなかった曾祖父について、ここで一言すれば、曾祖父は、万延元年の一揆を影で操っていた人物である。曾祖父の弟には一揆後の脱出を約束し、曾祖父の弟率いる若者組を一揆の立役者に仕立てあげ、一揆終了後は、倉屋敷に籠城していた彼らを誘き出して藩に譲渡した人物こそ曾祖父にほかならなかった。まことに、曾祖父は、演出の才に秀でた人物だったわけで、蜜三郎は、もちろん、この曾祖父の系列に位置づけられる。したがって、根所家の血の系統は、ごく単純化すれば、曾祖父——蜜三郎のラインと、曾祖父の弟——鷹四のラインとに分けることが可能である。しかし、この時、見落としてはならないのは、曾祖父の弟の系列の血を末裔に伝えていくのが、彼ら自身ではなくて、もう一方の曾祖父の系列の人物たちであったという事実である。蜜三郎は、自分の子供のほかに、鷹四と菜採子の間にできた子供の養育も行う気である。いわば、その子供は、蜜三郎の中を流れる鷹四的な血の具象化と解釈できよう。要するに、村が存続していくためには、恐れぬ者だけではなく、その血を後の時代へ

運ぶ恐れる者が不可欠だったのであり、このことから、蜜三郎の存在に積極的な意義を見出すことができるのである。

五、鷹四への回答

『万延元年のフットボール』のラスト・シーンには、『個人的な体験』（一九六四年八月）に引き続き、またしてもアフリカが描かれる。蜜三郎は、村を去って、アフリカへ赴く意を固めるが、村との紐帯を、蜜三郎が確認しえた以上、それは、村との断絶を意味するものではない。「その森を越えて僕と妻と胎児は出発し、そして窪地を再び訪れることはないだろう。すでに鷹四の思い出が『御霊』として谷間の人間たちに共有されるとすれば、われわれがかれの墓を守るとは必要でない。」と、蜜三郎は語っている。蜜三郎は、鷹四の「御霊」の住まう場から離れる一方で、鷹四の分身である「胎児」を引き受けてもいたのだ。鷹四との交信は絶えておらず、根は絶えていない。また、養護施設の子供を取り戻そうとする蜜三郎は、すでに、村へ帰る以前の蜜三郎ではない。『万延元年のフットボール』のアフリカは、子供を殺し、現実を放棄したところに広がる、『個人的な体験』のアフリカとは、まったく異なる世界である。

そして、アフリカでの蜜三郎の役職は、通訳の責任者という、言葉に携わる者として設定されてもいた。このことから、アフリカを、言葉の場として位置づけることも可能であろう。さらに、アフリカには、もうひとつの象徴が託されている。その伏線は、鷹四にとってのアフリカに示されていた。桃子によれば、鷹四は、人間に「まだ善いところが残っている」理由を、「人間がまだ、はるばる海を越えてそれ

(象)を輸送してもどって、動物園に飼っておくといったことをするから」(括弧内は引用者)だと考えており、自分でも「倉屋敷に造り付けた檻に象を飼って、谷間のどこで遊んでいる子供たちにも、仰向けばすぐ象が見えるように石垣の下の高い木はみな切り倒そうと考えていた」という。動物園に漂う、人間の奢りに対する認識は、本作品に欠如している点かと思われるが、ともかく、鷹四が夢見ていたアフリカは、子供のための、言い換えれば未来のための場としてある。

ここで、アフリカを大江に引きつけて考えるならば、言葉の場としてのアフリカは、作家大江にとって、言葉によって小説(虚構)を構築する場といえるだろう。本作品を通じて、大江が、言葉の現実に対する働き掛けに意義を見出していることは、蜜三郎と鷹四との関係の考察からも明らかである。ただ、その場合の言葉には、現実根づき、かつ自己の情動に根づいたものでなくてはならないという条件が備わってもいた。しかし、蜜三郎に与えられた通訳という仕事は、言葉に関わるとはいえ、他者の発した言葉に絶対的に依存しているものであり、他者に根づいている。そして、アフリカで蜜三郎を待ち受けている生活は、「ヘルメットをかぶりスワヒリ語を叫び、昼となく夜となく英文タイプを打って、自分の内部でなにが起っているのかを検討する暇もない」生活として描かれる。蜜三郎の叫ぶスワヒリ語も、タイプに打つ英文も、蜜三郎の「内部」に根ざし、故郷に根ざす八母なる言葉Vからは、遠く隔たっているといわなくてはなるまい。大江は樂觀していない。虚構によって現実を動かそうとすることが、いかに困難極まりない試みであるかを、大江は、痛切に自覚しているといっている。アフリカは、また、未来の象徴でもあったが、その未来も、大江

にとつて、容易には輝かない未来である。しかし、それでもなお、蜜三郎をアフリカに向かわせようとした大江には、その困難を乗り越える意志があると、私は思うのである。

※

さて、大江は、鷹四の批判にどう答えたであろうか。以上の考察に基づいて、大江の回答を作成する。

※

《鷹四よ、君の言う通りだ。僕は自分自身の「本当の事」をついに言うことはなかった。僕は勇敢さに欠けている。僕が村のことを村の中にいてではなく、村の外から書くのも、そのためかもしれない。しかし、僕がいなければ君もまた存在しない。僕には僕なりの村との関わり方がある。そのことがわかったように思う。僕は楽観してはいないが、かといって絶望もしていない。僕は言葉の力を信じている。》

〔注〕

- 1 『大江健三郎全作品 第1期4』所収（一九六六年二月二五日新潮社発行）。
- 2 「大江健三郎——自己回復と自己処罰」（われらの文学18『大江健三郎』解説、一九六五年講談社刊）。
- 3 「大江健三郎における土着と近代——『万延元年のフットボール』をめぐる」（『国文学解釈と鑑賞』一九七一年七月号）。
- 4 『大江健三郎の世界』第四章（一九七二年一〇月二〇日講談社刊）。
- 5 「『万延元年のフットボール』」（『国文学解釈と鑑賞』一九

七一年七月号）。

6 「精神の地獄をゆく者」（『大江健三郎論 精神の地獄をゆく者』第五章、一九七三年七月五日立風書房刊）。

7 「作品とその評価史『万延元年のフットボール』」（『国文学解釈と教材の研究』一九八三年六月号）。

8 「『万延元年のフットボール』」（『国文学解釈と鑑賞』一九六九年九月号）。

9 なかには、例外的に、片岡啓治のように、「その死において、あるいは鷹四に死をととのえるしかなかったことにおいて、大江氏は、そこに『本当の事』はない、という苦しいイロニーと、△ひき裂かれた自我▽を生きねばならぬ生者にはそれがついに無縁でしかありえぬことを、それもまた△にせのidentical▽でしかありえぬことを、はっきりみてとったはずである。」（注6に同じ）と、鷹四を否定的に捉える見解もある。私は、蜜三郎に積極的な意義を見出すものであるが、かといって、鷹四を否定するつもりは毛頭ない。

○『万延元年のフットボール』の引用は、『大江健三郎全作品 第1期1』（一九七七年一月一〇日新潮社発行）に拠った。